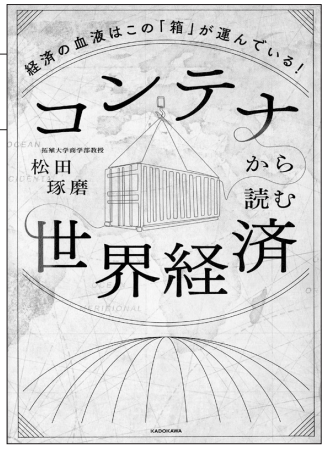
松田琢磨＝著

コンテナから読む世界経済
―経済の血液はこの「箱」が運んでいる！―



2023年3月発行
本体1,800円＋税
KADOKAWA
ISBN 978-4-04-112497-0

大森孝生
OMORI, Takao
一般財団法人運輸総合研究所特任研究員

コンテナというと，整然と並べられたカラフルな箱を運ぶコンテナ船が先ず思い浮かぶ．コンテナ船の航海ルートは国際貿易を支える海上輸送の血管であり，世界標準でサイズが統一されたコンテナの箱はまさに血液である，と筆者は例え，世界経済との繋がりを解説する．

コンテナが，いかにグローバル経済を支え，貿易業務に関わる決済や売買を支える仕組みとどのように結びついているのか．コンテナの中身=貨物に意識を向け，商品特性を睨んだコンテナの活用，コンテナ船の大型化の流れ，グローバル視点でのコンテナの箱そのものの需給にも着目し，国際貿易を担うコンテナの役割を紐解く．

コロナ禍においては，米国西海岸や主要積替港でコンテナ船が滞船した．運賃が高騰し，世界中でコンテナが不足したニュースは記憶に新しい．感染者が増加し労働力不足となった物流インフラの稼働率低下だけではなく，米中貿易摩擦との因果関係，貿易構造の変化，新造コンテナ数の推移も大きな影響を与えていた．

米中経済摩擦，ロシアによるウクライナ侵攻，ガザ地区でのイスラエルとハマスの対立等の地政学的変化によって，企業のサプライチェーンはその影響を直接受ける．政治・経済の不確実性がますます高まる中，自然災害による影響も含めて，企業が構築するサプライチェーンのどこに脆弱性が存在するのか．商品の仕入れ先，在庫レベル・保管場所，物流インフラの稼働状況や輸送手段の多様なオプションを評価し，リスクの所在と発生した時のインパクトを絶えず見直さなければならない．

それら多様な要因をいかに考えながら物流を組み立てることが重要なのか，この本は気づかせてくれる．

「選ぶ立場から選ばれる立場へ」世界の海運会社や企業にとって，日本は選択肢の一つに過ぎないとの記載がある．アジア－北米の太平洋航路において，2021年の日本のコンテナシェアは2.7%にとどまり，大型コンテナ船はシンガポール，ベトナム又は中国沿岸等で大量の貨物を積載し，日本海・津軽海峡を通過して北米に向かう航路が主流になっている．日本の港の相対的な位置が低下していると指摘しているのだ．

この本を読みながら，こんな事を考えた．

コンテナは，寄港するそれぞれのコンテナターミナルで大型クレーンによる荷下ろしを経て，ヤードに無駄なく積み上げられ，通関や検疫手続きを待つ．そのコンテナがコンテナターミナルを出たとたん，多様なカラーのコンテナと同様，貨物の特性，港湾周辺の道路・鉄道などの交通インフラ，産業集積拠点や消費地によって，それぞれ異なる動きを始める．農産物は検疫所に向かい，消費財は一部倉庫で在庫保管，生産部品は工場に直送される等，多種多様な物流ルートをたどる．

貨物を届けた後，空になったコンテナは，新たな輸送需要や運賃収入を求めて，次の旅の準備を始める．コンテナ船で輸送されるコンテナは，陸に降ろされたとたん，その国々での地域特性や商品需給に応じて，個性を持って動きはじめるのだ．

IoTの発展によって，コンテナとコンテナ同士がしゃべりだし，最適な物流ルートを選択する，そんな時代がすぐそこまで来ているのではないか・・・．

国際貿易・物流に興味を持つ方々に，是非読んでもらいたい一冊である．